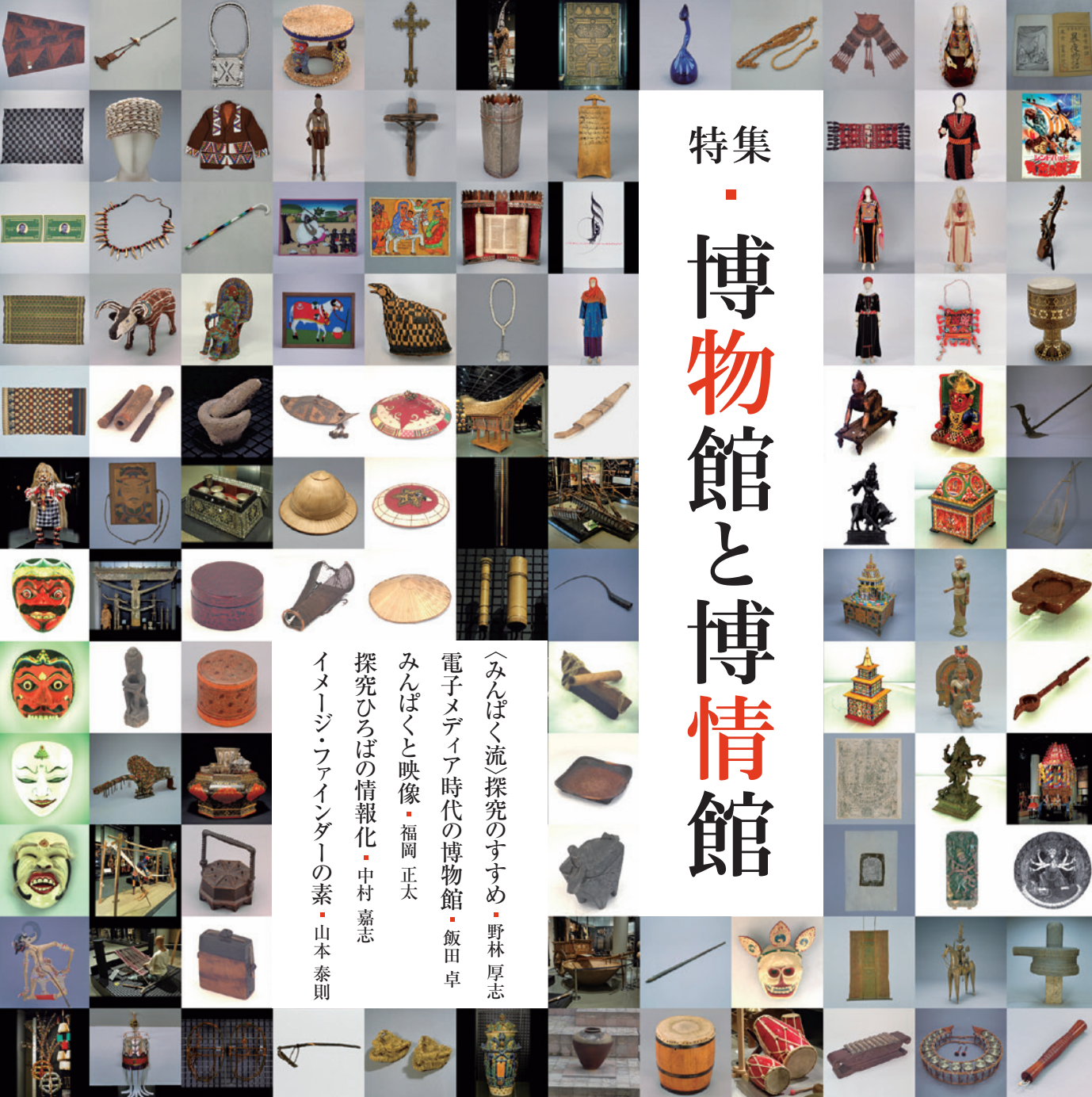


月刊

2012

5
月号

みんぱく



特集

博物館と博情館

〈みんぱく流〉探究のすすめ・野林厚志
電子メディア時代の博物館・飯田卓
みんぱくと映像・福岡正太
探究ひろばの情報化・中村嘉志
イメージ・ファインダーの素・山本泰則

東北民謡を追いかけている。東
日本大震災以降、東北の声を聴き
たくなったのだ。

岩手県の民謡に「牛方節（南部
牛追唄）」がある。その発祥の地
は岩手郡葛巻町だと言われている。
葛巻は北上山地の山間部にあるか
つての宿場町だが、ここでは江戸
期から馬や牛の放牧が盛んだった。
周囲の山々に天然芝が広がって
いたことによる。岩手県の牛方（牛
の世話人）は、葛巻出身者がほと
んどだった。

葛巻町から東の方向、険しい山
道を三陸海岸へ四十数キロ下り
ると野田村がある。野田村は東日本
大震災で壊滅的な被害を受けた。
この野田と葛巻をつなぐ道路を「野
田街道」と言い、かつては「塩の道」
とも呼ばれた。

野田村は江戸時代から戦後初期
まで、製塩事業で栄えていた。海
岸の浜辺で大きな鉄鍋に海水を入
れて煮る、というもつとも単純な
製塩方法で、この地方の塩を一手に
担っていた。その「野田塩」を牛の
背に載せて北上山地を越えて運ん
だのが、葛巻出身の牛方たちだった。

田舎なれども 南部の国は

西も東も金（かね）の山

こいらんやあ



民謡が口頭伝承であった時代

佐々木幹郎

プロフィール
詩人。1947年奈良県生まれ。同志社大
学文学部中退。ミンガン州立オークラ
ンド大学客員研究員、東京藝術大学大
学院音楽研究科音楽文芸非常勤講師
を歴任。著書に評論『中原中也』（筑摩
書房、サントリー学芸賞）、詩集『蜂蜜
採り』（書肆山田、高見順賞）、エッセイ「ア
ジア海道紀行」（みすず書房、読売文学
賞）、「人形記」（淡交社）など。編著に
『新編中原中也全集』全6巻（角川書店）、
最新刊に詩集『明日』（思潮社）。

牛を励ましながら、牛の歩みの
リズムにあわせて「牛方節」はう
たわれた。「西も東も金の山」とい
うのは、南部藩は田舎だけれども、
どの山からも砂金が出る土地だ、
ということ誇っている。しかし
文字だけで民謡の歌詞を追って
いると、その歌詞が秘めている生活
の感覚がわからない。牛方のほと
んどは文字が読めなかった。民謡
は口頭伝承で伝わっている。「金」
をなぜ、「さん」とうたわずに、あ
るいは「黄金（こがね）」でもなく、
「かね」とうたってきたのか。

昭和初年代にこの地方を門付け
していた盲目の津軽三味線の演奏
者・初代高橋竹山（一九一〇〜
九八）は、まったく別の解釈をし
ている。彼は牛方とともに山道を
歩きながら、牛方にこう教えられ
たという。

牛にはアブやハエがいつも飛び
回っていて、「ゴォーン、ゴォーン」
と鐘のような音がしている。「西も
東も金（かね）の山」というのは「西
も東も鐘の山」のことだと。

初代竹山が「牛方節」をうたう
ときは、その生活感覚を匂わせて
うたった。この「かね」の解釈は
説得力があつて、砂金と解釈する
のと同じくらい、牛方のロマンに
満ちている。

月刊
みんぱく
5月号目次

1 エッセイ 千字文
民謡が口頭伝承であった時代 佐々木 幹郎

2 特集 博物館と博情館

- 2 〈みんぱく流〉探究のすすめ 野林 厚志
- 5 電子メディア時代の博物館 飯田 卓
- 6 みんぱくと映像 福岡 正太
- 8 探究ひろばの情報化 中村 嘉志
- 8 イメージ・ファインダーの素 山本 泰則

10 研究フォーラム
「母国」に「帰国」した移民から故郷の意味を問う
奈倉 京子

12 みんぱく Information

14 みんぱくを離れるにあたって
宗教から世界を見る、世界から宗教を見る
みんぱくでの35年
中牧 弘允

16 連載リレー 知の収蔵庫
ボクシングの文化論 3の2
おれは最高だ!
櫻永 真佐夫

18 多文化をあきなう
生きることを大切にしておく店
鈴木 紀

20 異聞逸聞
バジャマと一張羅
小川 さやか

21 みんぱく私の逸品
百貨店店員用制服（ワンピース）
高橋 晴子

22 フィールドで考える
波の神を祀る人びと
吉本 康子

24 次号予告・編集後記

〈みんぱく流〉探究のすすめ

野林厚志 民博研究戦略センター

「うら」の名前

「はくじょうかん」ということを聞いたとき、ひとは何を連想するだろう。ちなみに筆者がこの原稿を書くために使っているワープロソフトの変換では、最初に「薄情間」と出力され、第二候補は「白状間」となっていました。じつは、ここでとりあげる「はくじょうかん」とは、我々になじみの深い、「はくぶつかん(博物館)」に対して、情報を集め、蓄積し、供覧し、さらに外に向けて発信していく装置として、みんぱくに与えられたもうひとつの名前なのである。漢字で書くと博情館、もちろん、この名称は館内のどこにも掲げられていないし、辞書に載っているようなことばでもない。来館者や友の会の会員はもとより、みんぱくを共同利用している国内外の多くの研究者も耳にしたことはほとんどないであろう。

この名前は、みんぱくのなかで展示や図書、標本資料や映像音響資料にかかわる仕事をしていると、どこからともなく聞こえてきて、なるほどとうなずくことになる類いのものである。筆者自身は大学院生のころに籍をおいていた大学博物館で、指導教官から博情館とすることがあり、それがみんぱくに関係していることを何度か聞かされていた。学術資料を収蔵し、それを後世の研究者へ伝えていくことを第一の目的とする大学博物館において、標本資料と学術情報とのつながりは生命線といえよう。博物館ということばだけでは、知の空間の意味を伝えるには物足りないことは大学博物館でも意識されていたのだと今にして思う。

理念のひとつ

博情館ということばは、みんぱくの建築設計をてがけた黒川紀章氏が梅棹忠夫初代館長との対談で用いたのが最初のようなのである。みんぱくは情報の博物館という考えかたがその対談の随所で示されていた。博物館は「物」の集積所であるばかりでなく、「情報」の集積所でもあるべきだという考えかたは、創設以来、館員のあいだで共有されてきたみんぱくの理念のひとつであろう。標本資料の収集に並行して映像取材をともなう調査が積み重ねられ、世界のあらゆる地域のさまざまな図書、出版物が集められてきたのはその動かぬ証拠である。ただ、集積した情報をどのようにして利用するか、さらにはどのようにして、それらをいつでも利用できる状態にしておくのかという方法については、研究者のあいだでも温度差がある。だからこそ、情報学を専門とする教員がみんぱくに在籍し、情報管理施設という世界的にもユニークな部署が設けられ、博物館のなかで情報を扱うスキルを育ててきたのである。

とにかく、忙しい

一方で、インターネットと通信手段の革新は、我々の手が届く情報の範囲とそれに要する時間を劇的に変化させた。かつての情報が、テレビ、ラジオ、新聞を通して、情報を作ることをなりわいとする集団が、広範囲に、限られた時間のなかで流通させる類いのものと、個人がおたがいの顔が見える範囲で、直接接触する時間のなかで伝え合うものであったならば、現在の情報は、個人がインターネット等を通じて、見えない相手が発信しているものを探り当てていくことによって広がっていくものである。そして、その行為は時と場所を選ばない。通勤列車のなかでこぞってコミック雑誌を広げ、漫画の世界にひたっていた人たちの多くが、今では、携帯電話やスマートフォンで世界の情報と瞬時につながっている。二四時間眠らないTwitterやFacebookは情け容赦なく情報をはきだし続け、人びとに休む間を与えない。瞬時に飛び交う情報に、追いつくの精いっぱいな情報環境に生きる人びとが、みんぱくも含めた博物館、美術館の来館者のなかに増えつつある。ゆっくり展示を見たいが、まずは短い時間でほどほどに納得できる答えを知りたいという気持ちをもつのもしかたのないことだろう。



特集 博物館と博情館

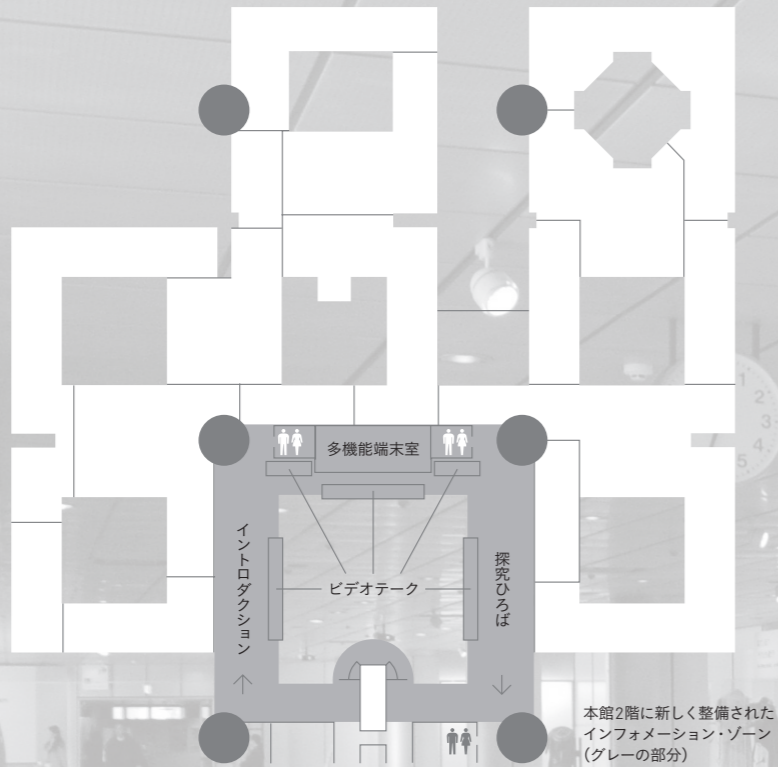
みんぱくの本館2階に、インフォメーション・ゾーンが新しくできました。展示場への入り口にあたる「イントロダクション」、みんぱくの研究や展示をより詳しく知るための「探究ひろば」、さまざまな地域の生活や文化を紹介した映像番組を視聴できる「ビデオテーク」の3つのセクションが中央パティオ「未来の遺跡」を囲むように配置されています。みんぱくに蓄積された情報と外につながる世界を結ぶあらたな空間の誕生です。

インフォメーション・ゾーンの一角に設けられた「探究ひろば」

時間をかけて

じつは研究者たちもどっぷりとその環境に浸ってしまっている。そうした自省もこめてなのか、「みんなくに来るときは時間を忘れてほしい」、現在進められている本館展示のリニューアルには、特にそんな願いが込められているように思える。ひとつひとつの資料がもつモノ語りを展示とおして伝えるという創設以来の理念を時代にそくしたかたちで再構築しようとしているのだ。それは人類学が時間をかけて相手を理解しようとするフィールドサイエンスであり、みんなくの展示や出版物、映像番組はそうした営みから作りあげられてきたからにはかならない。手っ取り早く人類の文化を理解していただくのは困るし、なによりも、薄情な展示やコンテンツはみんなくにはあってはならないのである。

今回新設された「探究ひろば」は、最新の情報機器をつかいながらも、時間をかけて展示を観覧し、そこから自由に発想し、知識を究め、知的創造を促す「みんなく流探究」を手助けするための空間として構想した。情報ということばがふれる今こそ、情報のさらさらその奥にある世界へとつながる「はくじょうかん」みんなくの魅力を皆さんに味わっていただきたい。



電子メディア時代の博物館

飯田卓 いいた たく 民博民族社会研究部

メディアとしての博物館

みんなくの初代館長だった故梅棹忠夫の著書に『メディアとしての博物館』(平凡社、一九八七年)というのがある。そのなかで彼は古い骨董品の行き場としての博物館でなく、未来にむけて社会的役割をはたす博物館というイメージを提起した。この考えかたは、今ではさしてめづらしくないが、一九八〇年代の博物館ブーム前夜はたいへん斬新だった。

しかしいつぼう、メディアとしての博物館といういまわしは、どうだろう。博物館がなにかを伝えるメディアだということは、比較的多くの人が認めるかもしれない。しかし、インターネットや携帯電話のような電子メディアと比較すると、博物館は見劣りすると思う人が多いのではないか。

じつさい博物館は、運営コストが大きいわりに、アクセスしにくいメディアである。面白そうな展示会があっても、すぐ見に行けるとはかぎらない。ふつうなら、予定をやりくりして時間を見つけて、車や電車に乗って出かけることになる。期間限定の展示会なら、ぐずぐずしていると終わってしまい、二度と見られない。面白いと思っただけからそれを見るまでの時間と出費を考えると、とても効率が悪いことがわかる。

五感を刺激する展示

ひかえめにいっても、博物館は「重いメディア」である。たんに情報をえるためだけなら、もっと簡単な方法に頼ったほうがよさそうだ。

二二世紀のメディア状況で、皮肉をこめずに博物館をメディアと



右：みんなくには、多数の出版物が所蔵されており、その一部は「探究ひろば」でも閲覧が可能だ
左上：みんなくの研究者による最新の調査・研究についても紹介している
左下：リサーチデスクにそなえられたイメージ・ファインダーに映しだされる資料を選択すると、地域や展示場所といった基本情報のほかに、書籍・論文やビデオテーク番組など、関連するさまざまな情報を調べることができる。展示を見る前の予習や見たあとの復習、展示場を歩きつ戻りつて、自分だけのお気に入りの展示資料を見つけることもできる



みんなばくと映像

福岡 正太 民博文化資源研究センター

諸民族の文化を映像におさめる

西暦二〇二二年の今、わたしたちは、インターネット上の動画配信サイトで、世界中のあらゆる映像を見ることが出来る。しかし、みんなばくが開館した三五年前、普通の人



モノには、温度や質感といった、視覚のみではとらえきれない豊富な情報がつまっている。実際に触れて楽しめるのも「探究ひろば」の魅力である

よぶためには、もう少し条件が整わなければならぬと思う。ひとことではいえない、電子メディアが伝えられない知覚刺激こそ、展示が積極的に伝えていく必要がある。そうして展示の可能性をビジュアル（ユーザー）が身近に感じられれば、博物館もりっぱなメディアとよべるのではないだろうか。

電子メディアが伝えきれない知覚刺激としては、展示全体がもつ立体感や、高品質の視聴覚効果、においや手ざわり、空間を共有する人たちのやりとり、などがある。どれをとっても、電子メディアがはびこるなかで、見過ごされそうなことばかりだ。そして、これだけの効果を総合的に伝えられるメディアは、博物館においてほかにない。

新時代のメディアとして活用を促す

みんなばくにできた「探究ひろば」は、じつをいうと、博物館を新時代のメディアとしてひとり立ちさせる試みでもある。電子メディアが伝えない触覚情報を、「世界をさわる」のコーナーでは楽しめる。また、展示場の空間的な広がりや、「リサーチデスク」のイメージ・ファインダーという装置で体験できる。

この装置は、広い展示場に散在する展示物（標本資料）の画像を、たくさんコンピュータに収めたものである。電子技術を駆使してはいるが、その意図するところは、装置を利用した後でまた展示場に帰ってもらうことにある。自分の関心に沿った展示物のリストをもって広い展示空間を歩き、そのスピードで発見をえていくこと。その愉快さは、順路に沿った展示観覧でも、電子メディアでも体験できない。ぜひ試してみ、博物館をメディアとして使いこなしてほしい。

にとつて、インターネットなど想像もつかなかった。その時代に、世界中の諸民族の文化や社会を映像によって紹介するために作られたシステムがビデオテークである。ブースの操作端末から見たい映像番組を指定すると、コントロール室ではロボットアームがビデオテープをとり出して再生機にセットする。今はすべてコンピュータのなかでやっ

べて、そこからあらたな意味を読みとることが可能になる。たとえば、多くの海外ロケにおいて撮影するもののひとつに市場の風景がある。市場を見ることによって、そこに暮らす人びとの生活の一端を知ることができる。異なる地域の市場の映像を見比べることで、それぞれの地域の生活習慣、経済活動の特徴を読みとることができるかもしれない。あるいは、年代を経て撮影されたふたつの映像からは、そのあいだの時代の変化を読みとることができる。

「発見の場」として活かす

三五年前には、映像で世界を見せるというコンセプトや装置としてのビデオテーク自体に大きなインパクトがあった。現在は、メディアや装置の珍しさではなく、この間に蓄積してきたコンテンツに大きな価値が生まれている。問題は、それらをどう活かすかだ。今回新設された「探究ひろば」においても、モノに文字による情報を加えるだけでなく、映像や触感からもアプローチする工夫が加えられている。これは、蓄積された映像を、単なる紹介や説明ではなく、「発見の場」として活かすための第一歩である。今後、貴重な映像の蓄積を活かすための工夫は続く予定である。

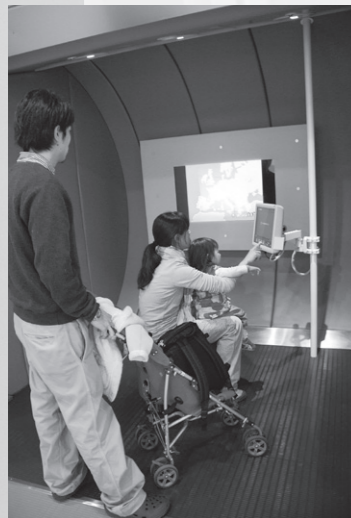
映像を作り続ける意義

しかし、今は、誰でもどこでも映像を撮影し、誰でもどこからでもインターネット上に映像を公開できるようになった。それも三五年前とは比べ物にならないほどの高画質のビデオ映像である。世界のさまざまな映像が珍しくなくなってきたこの時代に、みんなばくが映像を作り続ける意味はあるのだろうか。

もちろん、こんな時代だからこそ、文化人類学と周辺諸分野を専門とする研究機関として、学術的な裏づけをもつ映像を製作することには大きな意味がある。変化する世界の社会や文化を記録し蓄積していくことは、人類の文化の多様性や創造性の記録として重要である。

一方、映像の蓄積が進むことにより、異なる映像を見比

団体や親子連れ、ベビーカーや車いすといった、利用者のあらゆるニーズに応えられるよう、リニューアルしたビデオテークブース



開館当初の「ビデオテーク」コントロール室

探究ひろばの情報化

中村 嘉志なかむら よしゆき 国士舘大学准教授・民博 客員教員

コンピュータが複雑なわけ

情報化にはコンピュータの利用が欠かせない。しかしコンピュータと聞くと大げさな装置を思い浮かべる方が多いのではないかと思う。取っつきにくさを覚える方も少なくない。確かにそれらを製造するためには大規模な工場と最新の設備、多くの優秀な研究者や技術者が欠かせない。その意味では大仰な装置ではある。そしてコンピュータが成り立つためにはハードウェア、すなわち物質としてのその他に、コンピュータをコンピュータたらしめるソフトウェアや、近年ではネットワークとよばれる通信技術も必要である。このような構成要素の多さもコンピュータの理解を妨げる要因であるのかもしれない。

また次々に生み出されるあらたなことばも理解の妨げになっているようである。例えばクラウドということばを最近では耳にすることもあられるのではないかと思う。これは何なのかと尋ねられる機会も多くなった。古くから(といってもコンピュータの歴史は一世紀にも満たないが)ネットワークを雲のように描くことがあり、そこからネットワークに接続して利用する色々なサービスを総称して雲クラウドサービスとよばれるようになったのである。一方でネットワークさえあれば場所や時間にはとらわれない、そういう感覚

でサービスを利用して欲しいという設計者の願いのあらわれでもある。いずれにせよ雲とは大げさなことばの使い方ではある。

しかしコンピュータが「出来ること」に目を向けると極めて単純な装置であることが見えてくる。この稿ではコンピュータを利用することに對する垣根を少しでも低くできればと思う。

道具としての計算機

コンピュータ、漢字で書けば計算機である。専門家はカタカナではなく漢字表現の計算機ということばをよく用いるが、一般に計算機といわれると思ひ浮かべるのは電子卓上計算機、そう、電卓なのではないだろうか。誤解を恐れずにいえば、計算機と電卓は基本的には変わらない。文字どおりどちらも計算をすることが本質だからである。大げさにとらえる必要はないのである。人間のように閃くわけでもないけれど、物事を予測するわけでもない。そんなことはない、少なくとも予測には計算機が使われているのではないか、と思う向きもあるかもしれない。しかしそれは計算式に裏打ちされたものであつて何かを推測しているわけではない。あくまで計算の範疇である。

計算機と電卓のあいだにはもちろん違いもある。それは、計算の種となる数値を数多く記録出来るということ、接続された色々な機器とのあいだで信号を送ったり受け取ったりすることが決められた手順に従って出来るということである。前者の数値は一般にはデータとよばれている。後者の信号のやりとりは結果的に制御に繋がる。例えばコンピュータが車のエンジンを動かしてい

イメージ・ファインダーの素

山本 泰則やまもと やすのり 民博 文化資源研究センター

新しくできた「探究ひろば」の「イメージ・ファインダー」を使ってみよう。画面一面に並んだ展示資料の写真にタッチすると、その資料の簡単な解説を見ることが出来る。また、その資料をもっと知るために、近くの本棚にある本や雑誌、関連する電子ガイドやビデオテープの番組を紹介してくれる。

これらの情報の元になっているのは、みんながインターネットに公開している標本資料関連のデータベースである。ひとつひとつの標本資料について写真つきで情報をまとめ、標本資料目録データベースと標本資料詳細情報データベース、みんなの出版物のなかから標本資料を解説している部分を探し、その箇所を資料別に整理した標本資料記事索引データベースなどがある。ほかにもジョージ・ブラウン・コレクションデータベースのように特定のコレクションに限って独自の情報を集めたものもある。これらは、だれもが自由に利用することができる。

みんなのすべての標本資料には、「標本番号」という個別の番号がつけられており、さきほどのデータベースとしては、標本番号を手

がかりに、たがいにリンクが張ってある。だから、ひとつのデータベースを調べて見つけた標本資料について、他のデータベースにはどんなことが書いてあるか、簡単に見られるようになっていく。ホームページの検索エンジンのように、さまざまなデータベースから関連する情報をいっぺんに検索できるといいのだが、残念ながら、使いがってのよいシステムはまだほとんどない。

今は、インターネットを通して、だれもが簡単にいろいろな情報をえることができ、また簡単に情報を発信できる時代である。しかし研究者というのは、なかなかデータ作りをやってはくれないものである。データを集める苦労は、むかしとあまり変わっていない。また、簡単にアクセスできるからこそ、情報の提供は慎重でなければならぬ。肖像権や個人情報のこと、さらにみんなくではそれぞれの地域や社会特有の文化にも配慮が必要である。情報に簡単にアクセスできるからこそ、かえって簡単に公開できなくなった時代でもある。

計算の効率や機能を追い求めると使い勝手は二の次になることもある。わざわざ設計手法として概念化しているのはそうなってしまうため戒めである。

今回「探究ひろば」に新設された「リサーチデスク」のイメージ・ファインダーも、人間中心の設計がなされている道具である。主役はあくまでも来館者であり展示物である。両者が滑らかに結びつくよう情報の見せ方に工夫がなされている。具体的には、みんなく内にある多数の展示物を分野ごとに並べて一覧して比較できるようにしてあったり、選り出した展示物の詳細情報の見せ方にも仕掛けがしてあったりする。みんなくの世界を探究するための道具として適切な距離感を持ってこれらに接して頂けたらと思うのが我々設計者の願いである。そしてぜひ来館して頂き、この道具を調べ物などにうまく使ってもらえれば幸いである。もはや大げさな装置ではないのである。

今後の計算機も人間中心に設計されることであらう。それによって計算機は人の知的生産性を飛躍的に伸ばしてくれる道具となっていくのではないだろうか。

探究ひろばの道具

初代館長の梅棹先生も著書『知的生産の技術』(岩波書店、一九六九年)で述べられているように、計算機は知的生産のための道具のひとつである。道具であればこそ主役は使い手の人間である。ただし情報を扱うことができる点が他の多くの道具とは異なる。情報、これはときに厄介な代物である。人は情報によって翻弄ほんろうされることがあるからである。まるでエンジン制御の例のように人が道具である計算機に踊らされるようであつてはならない。したがって情報の扱い方、特に人への情報の見せ方には細心の注意が必要である。

ここに人間中心設計という考え方が計算機の世界にはある。これは情報の見せ方が煩雑であったり多くの構成要素から成り立って複雑になったりしないよう、また、道具を道具たらしめるよう利用者の立場や視点からの使い勝手の良さを主眼に置いた設計手法のことである。作り手と使い手の利害は必ずしも同じではないので作り手の都合がしばしば優先されてしまうことがある。



「探究ひろば」をあとに展示場にもかう来館者。新しくなったインフォメーション・ゾーンは博物館と外の世界を結ぶ出入口だ



研究フォーラム

「母国」に「帰国」した移民から故郷の意味を問う

なぐら きょうこ
奈倉 京子

静岡県立大学専任講師

移住先国で生まれ育ち、いまだ見ぬ「母国」へ「帰国」することになった移民の第二世代以降の人びとがいる。彼ら／彼女らにとって「母国」は「故郷」か「他郷」か。帰国した人びとが日常生活の実践のなかでつくり上げてきた文化、組織的活動、人間関係のサークルをとらえて検討してみたい。

帰国華僑の「異文化」体験

わたしはこれまで帰国華僑を考察してきた。帰国華僑とは文字どおり帰ってきた華僑華人（個人、集団の両方を指す）のことである。ここではおもに、中華人民共和国誕生前後の一九四〇年代から一九七〇年代に東南アジアから帰国した華僑華人を対象とする。この時期の帰国の理由は大きくふたつある。ひとつは、第二次世界大戦以降、東南アジア諸国における国民国家形成の動きのなかで、華僑排斥運動が激化し、（半）強制的に帰ることを迫られたため。もうひとつは、中華人民共和国成立前後の一九四〇年代から五〇年代を中心に、中国（大陸）で進学するため、もしくは革命運動に参加するために、自ら進んで、あるいは両親の勧めで帰国を選択したのである。

フィールドで出会った帰国華僑と接していると、わたしとは国籍、年代などの条件は異なるものの、彼ら／彼女らと同じ気持ちになることがあった。それは留学生として異国の地にいるわたしと、共通する事柄があったからである。彼らは帰国当時、籍貫（父方祖先の出身地）を知っているものの、そこに家がなく、親族との連絡も途絶えてしまった人が大部分である。つまり、血縁・地縁上、一応は中国にゆかりがあるものの、彼らにとって実際、中国は「外国」であった。移住先地では、現地のこと

自分の力でやっていくかの選択を迫られた。彼女は政府に従うことを選び、江西に落ち着くことになり、地元の中學に編入した。ミャンマー時代、中華學校に通っていた。勉強が好きで、将来は中国の大學に進学し、教師になることが夢であった。ところが、江西では政治動乱のために授業を受けられない日々が続いた。高校卒業後は政府により靴下製造工場に配属され、退職までそこで働いた。「工場に配属されたときには地獄に突き落された気持ちだった」と、彼女は語る。ミャンマーの中華學校で聞かされていた理想的な中国と、現実の中国とのあいだには、大きなギャップが存在したのであった。彼女はずっと帰国を後悔していた。しかし、二〇〇九年、帰国後初めてミャンマーに親戚訪問に行き、ミャンマー経済の遅れを目の当たりにしたとき、「近年の中国経済の発達をみると帰国は正しかった」

と思うようになった。彼女は、ミャンマーから中国の江西、そして厦門と移動を繰り返してきた。どこ出身かと聞かれたとき、「安溪人と答えると発音が違うと言われる。江西には一番長くいたけれど、特に気にかける人もいないので愛着を感じない。今は厦門に家族がいるのでここが居場所。でもこれから息子が落ち着く場所に移動するかもしれない」。

彼女の故郷認識は、中国がミャンマーという国家を基準にすることや、籍貫がどこにあるかということのみならず、家族、親戚など自分にとって大切な人が今どこでどのような生活を送っているかということにも密接にかかわっている。更に、中国の政治的・経済的・文化的政策の変化や元移住先と中国との関係もまた故郷認識に影響を与えている。帰国華僑にとって「故郷」とは、周囲を取り巻くさまざまなファクターによって意味づけられ続ける流動的な概念である。

「故郷」について問う

生活経験のない「母国」へ「戻ってくる」「移民にとって」「帰」（戻ってくる）が何を意味するのかということについて追及するには、当事者が置かれた時代の国際社会的状況、出身国と移住先国との歴史・政治的・経済的関係や宗教的要因、家族や個人の価値観、社会的立場や経済



帰国華僑が集住する広東省台山（タイシャン）市華僑農場のインドネシア帰国華僑の長屋型の家屋

ばや中国の地方語（広東語、客家語、閩南語等）を話していたため、帰国してから改めて「普通話」（標準中国語）を学び、地元の気候、農作業、生活習慣といった「異文化」に適応していかなければならなかった。なかには心理的に不安定で、中国に根を下ろすことができず、再び第三の地へ移住したいと強く思っている人も見られた。実際に、香港、アメリカ、オーストラリアなどへ再移住している人も少なくない。

あるミャンマー帰国華僑女性の運命

わたしが「母」として慕うミャンマー帰国華僑の女性（一九五三年生まれ・籍貫は福建省安溪、厦門在住）がいる。彼女は一九六七年、ミャンマーのヤンゴンから近い小さな町から姉と二人で帰国した。雲南に着くと、今後の生活を政府に任せるか、

状況など多様な要素を考慮しなければならぬ。従って、かわる国家や地域によって帰国した移民の性格も、「帰」の含意も異なってくるため、さまざまな地域の移民の比較研究をおこなうことにより初めて「帰」との対話が可能になるであろう。

このような問題意識から組織されたのが、民博の共同研究「帰還移民の比較民族誌的研究——帰還・故郷をめぐる概念と生活世界」である。本共同研究では、アフリカ、フランス、ベトナム、日本、中国（大陸・台湾）、ニューギニアといった地域を対象にしている。そこで生きる「母国」に「戻ってきた」移民個人の生活世界、戦略的な生き方の選択、公的史観や血筋、身体的特徴、移住先でえた文化的要素や人間関係がいかにして彼ら／彼女らの生活を制限しているか、あるいは利用されているか、といったことについてミクロな視点から切り込み、実証的に考察する。それにより、移動によって故郷認識がどう変化するのか、どのように「故郷」が「創出」されるのか、または「故郷」は永久に固定されたものなのか、といったことについて検討していく。

共同研究

「帰還移民の比較民族誌的研究

——帰還・故郷をめぐる概念と生活世界」

代表：奈倉京子

2011年10月～2014年3月



ベトナム帰国華僑がつくる筒型の粽（ちまき）

特別展

【今和次郎 採集講義―考現学の今】
今和次郎が関東大震災後の日本で創始した考現学は世相を徹底的に観察・記録する学問で、生活文化の変化を捉える視点は民族学の目指すものと同じ。考現学の原点とみんなくでの展開を紹介し、モノと生活文化の関わりを考えます。
会期 6月19日(火) まで
会場 特別展示館

■関連イベント
◆ワークショップ
【みんなくを飛び出してモノ調べ・風景調べ】
何かテーマを決めて身近な風景やモノを見わたし、写真に撮って「切しらべ」、それら写真を持ち寄って皆で談論風発。一つの視点に基づいた徹底調査や比較は、誰にでもできる文化研究の第一歩、身近な生活世界を見つめ直してみましょ。

(2回連続講座)
1回目 5月27日(日) 10時30分〜12時
2回目 6月9日(土) 11時〜14時30分
会場 ナビひろば
※参加無料、要申込(5月20日応募締切)
※定員20組(1組何名でも参加可能)
※申し込み方法、参加条件についてはホームページでご確認ください。
お問い合わせ先
情報企画課ワークショップ係
電話 06-6878-8532

◆みんなく映画会
【記録映画 昭和の家事】
「昭和の家事」は、明治43年生まれの主婦、小泉スズさんが日常的に行っていた家事を彼女が暮らした家(現・昭和のくらし博物館/東京都大田区)で3年間にわたり丹念に撮影した記録映画です。昭和時代の庶民の生活の記録としても大変貴重な映像です。
日時 6月3日(日) 13時30分〜16時
(開場13時)
会場 講堂(先着450名)
※参加無料、申込不要

◆シンポジウム
【今和次郎が調査した民家の今―瀝青会による「日本の民家」再訪プロジェクト】
今和次郎著『日本の民家』掲載の民家約40軒を90年後に再訪した調査から、私たちの住まい方の変容をたどり、あわせて、生活空間をフィールドワークする作法について語り合います。
日時 6月9日(土) 15時〜16時30分
会場 第5セミナー室(先着80名)
※参加無料、申込不要

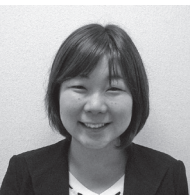
◆みんなくセミナー
【みんなくウィークエンド・サロン】
詳細は本誌24ページをご覧ください。
◆ギャラリートーク
日時 館内掲示、ホームページでご案内いたします。

みんなく映画会/みんなくワールドトクメタ
【僕たちは世界を変えることができる。】
But, we wanna build a school in Cambodia.
ありきたりな毎日を通している大学生が、カンボジアに学校を建てようという決心、友人たちに呼びかけます。その目標に到達するため苦勞し成長していく若者の姿を描いた、さわやかな青春映画です。
日時 5月12日(土) 13時30分〜16時30分
(開場13時)
会場 講堂(先着450名)
※参加無料、申込不要
※当日10時から講堂入口にて整理券を配布

研究公演
【忘れなれない絆 絶やさない伝統―震災復興と文化継承を願って】
東日本大震災の影響で存続が危ぶまれた三陸地方に伝わる鹿(しし)踊りと日本に根付いた阪神地方の中国獅子舞・龍舞を通して、震災復興と伝統文化の継承を考えましょ。
日時 6月9日(土) 14時〜16時30分
会場 玄関前広場
※雨天の場合 講堂(450名)
※参加無料、申込不要
※公演終了後、1階エントランスホールでワークショップを行います。
※6月10日(日)には、神戸の鉄人28号モニメント前での公演を予定しております。
お問い合わせ先
広報企画室企画連携係
電話 06-6878-8210

◆無料観覧日のお知らせ
5月5日(土・祝)のごものは、特別展本館展示を無料で観覧いただけます。ただし自然文化園(有料区域)を通行される場合は、入園料が必要です。
*電話でのお問い合わせの受付時間は9時から17時(土日祝を除く)です。

【研究部の新メンバー】
小川さやか助教(研究戦略センター)が4月1日付けで着任いたしました。国立民族学博物館・機関研究員を経て現職。専門は、文化人類学、アフリカ地域研究。著書に、「都市を生きかためた地の狡知―タンザニアの零細商人マチンガの民族誌」(世界思想社)、論文に、「タンザニアにおける古着輸入の規制とアジア製衣料品の流入急増による流通変革」(吉田栄一編「アフリカに吹く中国の嵐、アジアの旋風」(アジア経済研究所)所収)などがある。



川瀬慈助教(文化資源研究センター)が4月1日付けで着任いたしました。日本学術振興会特別研究員PD/京都大学、同海外特別研究員/マンチエスター大学を経て現職。専門は映像人類学、民族誌映画制作、エチオピアの音楽芸能研究。映像作品に「マリベロッチー終わりなき祝福を生きる」(Room 11, Ethiopia Hotel)、「精霊の馬」、著作に「見えるアシア・アフリカ―映像人類学の新天地」(共編/新書書房)などがある。

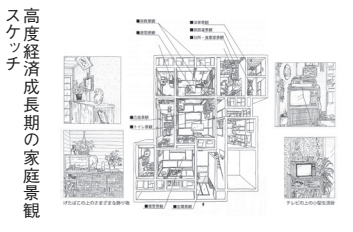
みんなくセミナー

会場 国立民族学博物館 講堂
時間 13時30分〜15時(13時開場)
定員 450名(当日先着順)
参加費 無料(展示をご覧になる方は、観覧料が必要です)

第408回 5月19日(土)
【特別展開連】
今和次郎 採集講義と日常生活文化研究の現在
講師 荻原正三(工学院大学 名誉教授)
黒石いずみ(青山学院大学 教授)
横川公子(武庫川女子大学 教授)
佐藤浩司(国立民族学博物館 准教授)

特別展に展示されている今和次郎のスケッチは、大正・昭和期の人々の普段の暮らしを生き生きと伝えます。また、その日常生活の細かな観察を記録し新たな視点で魅力や問題を探る方法には誰もが目を開かれます。今和次郎が民家研究や考現学で追求した事柄はいったい何だったのか、それが現代にどのような意味を持つのかを解き明かします。

第409回 6月16日(土)
【特別展開連】
生活財の考現学―高度経済成長期の家庭景観
講師 粟田靖之(国立民族学博物館 名誉教授)
定田正博(株式会社「イー・ディー」代表取締役)



今和次郎の「もちもの一切しらべ」を高度経済成長後の家庭の生活財に適用した粟田靖之名誉教授たちの研究は、家庭景観という視点で生活文化の現在と将来を見通した論考で、日本生活学会第5回「今和次郎賞」を受賞しました。共同研究者である定田正博氏とともに、当時の生活文化と現在について考えます。

友の会

友の会講演会(大阪)

会場 国立民族学博物館 第5セミナー室
定員 96名(当日先着順、会員登録必須)
第408回 6月2日(土) 14時〜15時
【特別展開連】
タイムカプセルとしての民家模型
講師 久保正敏(国立民族学博物館 教授)

民博の開館時につくられた、日本の4つの民家模型をご存知でしょうか?それらはTEM研究所による民家および家財道具一式の徹底的な調査、記録がベースになっています。学術資料として残すために練られた意図とその価値をあらためて考えてみます。
第409回 7月7日(土) 14時〜15時
【みんなくコレクションをかたる】
「みんなくコレクション」をかけた
蚊帳に見えない蚊帳のはなし
講師 白川千尋(国立民族学博物館 准教授)

ラオスの蚊帳は「虫除け」というだけではなく、さまざまな機能があり、女性の嫁入り道具にもなっています。この蚊帳との出会いは異文化にふれる醍醐味を教えてください。民博収蔵の美しい蚊帳をじっくりとお見せしながらお話しします。
第409回 7月7日(土) 14時〜15時
【みんなくコレクションをかたる】
蚊帳に見えない蚊帳のはなし
講師 白川千尋(国立民族学博物館 准教授)

東京講演会
第102回 6月9日(土) 14時〜15時
貨幣経済を問う視点
講師 小林繁樹(国立民族学博物館 教授)

物々交換や贈物交換活動と現代経済の違いは何でしょうか。単純に「貨幣」が媒介するかどうかではなく、人間関係や共同体意識がその鍵になります。アフリカをはじめとするオセアニアの交易などを事例に、現在の私たちの生活について考えてみましょ。

会場 江戸東京博物館学習室
定員 70名(要申込)
第65回体験セミナー 7月14日(土)〜15日(日)
鯨と人のくらしを考える
高知県立歴史民俗資料館、室戸市内の捕鯨関連史跡などを訪ねます。詳しくは「友の会」まで。

国立民族学博物館
ミュージアム・ショップ
電話 06-6876-3112
FAX 06-6876-0875
e-mail shop@senri-f.or.jp
水曜日定休
ウェブサイトもご覧ください。
オンラインショップ
[World Wide Bazaar]
http://www.senri-f.or.jp/shop/

特別展「今和次郎 採集講義」
考現学の今」関連商品

4月26日から特別展「今和次郎 採集講義―考現学の今」が開催されています。ミュージアムショップでは考現学の創始者・今和次郎に関連した書籍や、彼のドローイングをモチーフとした一筆箋やポストカードなどのオリジナルグッズを多数ご用意して、みなさまの来店をお待ちしております。



『今和次郎 採集講義』(青幻舎)	2,625円
雑誌『あおり草子』	
特集:考現学の創始者 今和次郎	600円
一筆箋(3種)	各420円
ポストカード(6種)	各150円
バッジ(6種)	各315円

価格はすべて税込

みんなくを
離れるに
あたって

宗教から世界を見る、世界から宗教を見る

中牧 弘允
民博名誉教授

みんなくにつとめて三五年、思い出は尽き
ない。開館時には最年少の部類だったが、い
つのまにか最長老となり、ついに定年をむか
えることになった。本誌にも数多く寄稿した
が、「死のダイレクト・メール」(一九七八年七
月号)がいわばデビュー作であり、「茨木の弁
天さん——聖地の効用」(二〇一二年三月号)
がトリとなった。ハワイの葬儀ではじまり、地
元の聖地で締めくくった格好である。

どの宗派・教団にも強くみられることである。
「祭りと芸能」では清楚にしてカラフルな世
界が日本の伝統文化にひそんでいたことが新
鮮な発見であった。白に象徴される清浄を好
むと同時に、赤に代表される派手さをそなえ
ていたからである。渡来の仏教はそこに「抹
香臭さ」を、キリスト教は「バタ臭さ」を加
味させた。そうして独特にブレンドされ、か
つ出自のちがいがわかる特異なブランドが形
成された。神は辛党で、仏は甘党だと分析する
フランスのグルメな文化人類学者もいる。感
覚から宗教にせまることも十分に可能なので
ある。

「祈る」の展示空間では「グローバル時代の諸
宗教」のコーナーをもうけ、カレンダーで宗教
文化の交流を表象しようとした。大西洋から
きたヨーロッパとアフリカの文化に比べ、太
平洋をわたったアジアの宗教にも居場所をあ
たえる布陣である。日系宗教のカレンダーを
展示してわかったのは、日常の生活倫理とし
てアメリカス社会に溶け込もうとする姿勢が、

このように、在職中、わたしは宗教から世
界を見ようとつとめ、逆に世界から宗教をな
がめようとした。たとえば、宗教のたとえで
社会を分析し、組織のたとえで宗教を把握し
ようとした。会社による物故従業員の供養を
靖国の「英霊祭祀」になぞらえたり、国際展
開をはかる日系教団を多国籍企業との類比で
「多国籍宗教」と命名したりしたのである。
みんなくの自由な雰囲気のおかげで研究と展



第1回「文明学」シンポジウム(1983)。前列左よりセップ・リンハルト、ヨーゼフ・クライナー、梅棹忠夫、ロバート・スミス、ハルミ・ベフ、後列左より石毛直道、横山俊夫、筆者、守屋毅の諸氏



シャーマンの衣装を試着(1994)。ブラジル・アマゾン人のマディハ人の村にて

示にたずさわることができたのは、僥倖以
外のなものでもなかった。研究としては海
外に進出した日本宗教を追いかけ、一九七
七年からハワイ、カリフォルニア、ブラジルで
調査に従事した。博士論文「日本宗教と日系
宗教の研究——日本、アメリカ、ブラジル」
(二九八六)の大半はみんなく勤務が可能にし
てくれたものである。

他方、おなじ一九九三年から開始された「経
営人類学」の共同研究は七期を数え、五つの
科研費プロジェクトを組織し、一〇冊以上の
書籍を世に送り出した。その大半を刊行して
くれた東方出版の今東成人社長から「五〇冊
は出さないと学派はできませんよ」と言われ
たことが励みとなっている。前途、遼遠であ
る。

ブラジルではさらに北東部の民衆文化、ア
マゾンの幻覚宗教、先住民のシャーマニズムな
ど非日系の文化にも研究領域を拡大した。た
だし、アマゾン研究に関しては、一九九三
年からの三年間の科研費調査にもかかわらず、ま
とまった研究成果を刊行できなかった。忸怩たる
思いである。

切手やコインに対抗してカレンダーの収集を
はじめたのも同時期であった。前二者が国家
による国民文化を表象するとすれば、後者は
国民文化はもとより宗教文化、企業文化、大
衆文化、民族文化、民俗文化など多様な文化
を内包している。カレンダーから世界を見るこ
とは研究の視野を広げることにつながっている。
わたしはカレンダー文化の研究を考古学・考

現学にならって「考暦学」と名づけ、みんな
くの標本資料とするべく収集に精を出した。
博物館と学校をむすぶ博学連携の取り組み
も忘れられない。日本国際理解教育学会とみ
んぱくが共催する夏の博学連携教員研修ワー
クショップは大阪府の初任者研修の場とし
ても活用されるようになった。教育といえ
ば、みんなくを基盤とする総合研究大学院大学に
もふかくコミットした。博士論文を書くのは
学生であり、わたしは産婆役に徹した。そし
て多くの出産に立ち会った。
みんなくは研究と展示、それに大学院教育
という三本の柱をもち、そのいずれにも濃密
にかかわれたことは、わが人生にとつて最大
のしあわせであった。



研究室の風景(1999)。オックスフォード大学ロジャー・グッドマン教授と



上海万博を調査中の「車椅子の人類学者」(2010)。左は曹建南上海師範大学副教授、右は張継焦中国社会科学院教授

中牧 弘允 (なかまき ひろちか)
東京大学大学院人文科学研究科博士課程修了。
文学博士。日本学術振興会奨励研究員を経て、
1977年4月より民博へ着任。総合研究大学院
大学文化科学研究科兼任教授、先端民族学研
究部長を歴任。専門は宗教人類学、経営人類学、プ
ラジル研究。おもな著書に『カレンダーから世界
を見る』(白水社)、『会社のカミ・ホトケ——経
営と宗教の人類学』(講談社)、編著書に『グロー
バル化するアジア系宗教——経営とマーケティング』
(東方出版)、『学校と博物館でつくる国際理
解教育』(明石書店)、『価値を創る都市へ——文
化戦略と創造都市』(NTT出版)など。

おれは最高だ！

榎永真佐夫 民博研究戦略センター

ジムではボクサーたちが、鏡を意識しながら練習している。だがボクサーの身体は、鏡を見つめる彼らのまなざしよりもっとたくさん、さまざまなまなざしのなかでつくられるのだ。情報メディアの発展も、まなざしの数を飛躍的に増大させてきた。のみならずそれこそが、ボクシング興業を二〇世紀に巨大ショービジネスへとかえた。

鏡のなかの自分

鏡のないボクシングジムは、想像しにくい。それくらいボクシングと鏡のかかわりは深い。

シャドー（・ボクシング）という練習法がある。鏡で自分の動きを確認しながら、攻防技術を磨くイメージトレーニングである。自分の鏡像から弱点を見つけ、それにつけてくる相手の攻撃への対処を考え、動く。鏡のなかの自分にまなざしをむけているのは、自分自身でもあり、同時に自分を痛めつけるはずの敵でもあるのだ。

シャドーは、古代オリンピックの拳闘家たちの練習にもすでにあったという。当時のギリシア人が語るところでは、ナルシジムの語源としても有名なナルキッソスは泉に映った自分の姿に見惚れた。またベルセウスは、直視した者を石にかえてしまうというメドゥーサの首を討ちとるために、青銅の盾を用いた。鏡は青銅製だったのである。市民の鍛錬の場ギムナシオンの壁に、高価

な青銅の鏡がはめ込まれていたのだろうか。文字どおり、影を見ながらのフォーム練習だったのではないだろうか。

ボクサーの身体

紀元前五〇〇年くらいの壺絵には、笞をもった拳闘の指導者が描かれている（そういえば最近、日本のボクシングジムで竹刀を見なくなった）。相手をうち負かすために、どのようにして強靱な肉体と精神を手に入れるかは、当時でも十分に考えぬかれていただろう。しかし拳闘家たちが、規律と訓練に基づき、まさに拳闘のために効率のいいフォームと身体をつくり上げていったのは、一八世紀以降のことである。ジェームズ・フィッグやジャック・ブローントンがいたこの時期（前回の「ボックス！」参照）、イギリスでボクシングがスポーツとして形をなしはじめた。効率のよさの追求は時代を経るごとに深められた。ボクシングのスタイルは洗練され、ボクサーの身体そのものもかわっていく。変化は、ボクサーのファイティングポーズの写真を、時代をさかのぼって練ってみるだけで明らかだ。

こんな話がある。

アメリカ音楽界の大御所ボブ・ディランは、ニューヨークに出てきたばかりの一九六一年、「マナッサの殺し屋」という異名までとった偉大な元チャンピオン、



匿名版画家による宣伝用「フィッグ・カード」(1794年)。中央の右側に立つのがジェームズ・フィッグ。(カシア・ボディ 2011『ボクシングの文化史』東洋書林)

叫んだ。一九六四年二月二五日のことである。

試合前から、クレイはリンドンへの激しい挑発をくり返し、揺さぶりをかけていた。だが、わたしはここで、勝利への駆け引きの話をしたのではない。重要なことは、クレイの登場がボクシング興業を、それまでとはけた違いに大きなショービジネスへと変えたことだ。

実際、リング内外での自分のスタイルを、彼はローマ五輪（一九六〇年）で金メダルをとったとき以来、テレビをとおしてつくり上げてきた。最初は、富と名声にあこがれる善良な好青年として、アメリカの白人社会からも支持された。だが、チャンピオンになるやいなや、マルコムXら過激なイスラーム系黒人活動家たちと手を結び、モハメド・アリと改名し、今度は白人社会を脅かす危険な著名人へと転じた。いずれも、マスメディアの力によるものだ。

もちろんマスメディアとボクシングのつながりは、さらに古い。一八世紀のイギリスで、素手拳闘の観戦と賭博が民衆の人気を博したのも、試合を告知し、結果を報道する活字メディアの発展に負うところが大きかった。その後のメディア産業の爆発的な拡大と発展が、モハメド・アリの登場を待って、ボクシング興業の全盛期をもたらしたのである。

究極の自己肯定

彼は、蝶のように舞い、蜂のように刺す、華麗なボディワークを完成させた。いずれ誰かに塗り替えられるべき記録は、一九六〇年代にはすでに、ボクシング界にもあふれていた。しかし、彼が初めて世界チャンピオンになった夜、なにか記録を自慢したのではない。最強を宣言したのではない。「最高だ」という究極の自己肯定だけであった。ただし、そのくりかえしはかなりしつこかった。管理がいきとどいていたはずの身体は、そのとき、内から引き裂かれ、突き破られ、みだりにはみでていた。ふつうシャドーで思い描かれることがない自由の激情が、身体へのあらゆる抑圧に対して勝ち名乗りをあげた、かりそめの瞬間であった。

ボクシングジムはとにかく鏡が多い



ビッグなショービジネスへ

ボクサーにかぎらず、スポーツ選手の身体には、徹底した管理といてもいいほど緻密な規律と訓練が、すみずみまでいきわたっている。もちろん彼らは、かぎられた時空間のなかで、自己を解放する自由を感じられるからこそ、自ら試合や練習に身を投じている。印象深いことがある。カシア・クレイ（一九四一—）が、ソニー・リンドン（一九三二—一九七〇）をたおして世界チャンピオンになったときのことばだ。

「おれは最高だ！」

リстонは強盗したり、警官をたたきのめしたりと、華々しい悪の経歴で身を飾っていた。リング上のファイターでも、対戦相手をとことく怯えさせた。クレイも怯えていた。リстонに殺される、とまで心配されていた。しかし大方の予想をくつがえし、史上最強とされた王者の顔を腫れ上がらせ、棄権に追い込んだ。興奮したクレイは我を忘れて「おれは最高だ！」と、何度も

生きる「じい」を大切にすること

鈴木紀

民博 先端人類学研究部

商品が売れることで、生産者が得るのはお金だけなのだろうか。生産者が商品をつくり、それが売れ、対価が支払われる。その過程において得られるのは、人間が生きていくための力そのものであるのかもしれない。フェアトレードとエコロジーの店「あいね」を経営し、生産の現場を訪ね歩く原いね子さんの話を聞いた。

いのちはめぐる

「あいね」は、大阪市の谷町九丁目にあるフェアトレードとエコロジーのお店だ。店の名前は、店主の原いね子さんの名前にちなむ。「いね」をローマ字でINEと書き、それを「あいね」と読むことにした。稲は日本の主食で、食べることは生きることを意味する。だから「あいね」には「生きる」という意味が込められている。

原さんが店をはじめたのは、二〇〇〇年一月。フェアトレードの考え方に共感し、自分の命の使い方としてフェアトレード商品を買うことを選択した。「わたしの命はわたしのもっている時間であり、それは宇宙の悠久のときからすれば一瞬にすぎないかもしれない。だからこそわたしは、自然体で、普段の暮らしを大切にしながら生きたいと思っている」と原さんは考える。「生きてるだけで丸儲け」とは、明石家さんまさんの座右の銘だが、原さんも、そのことを大切にしている。

「あいね」では、フェアトレードとエコロジー関係のイベントを開催している。フェアトレードが大切にしていく理念のひとつにサステイナブルがある。

「持続可能な」と訳されることばだ。原さんは、自然農法を実践する川口由一さんの赤目自然農塾に参加したとき、川口さんが「すべての命が巡る」と繰り返し話すのをきいた。このことばがサステイナブルの日本語だとしっくりきた。それ以来、原さんは、店のイベントに「いのちはめぐる」というタイトルをつけ、参加者がのんびり過ごせる心地よい催しを心掛けている。

フェアトレード団体を訪ねて

店をはじめて間もないころ、原さんはNHKの取材を受けた。「フェアトレードって何ですか。自分のことばでひとことお願いします。」そう言われて原さんは、自分がフェアトレードについて知っていることは、すべて聞いたことや読んだことだと気がついた。そこで、生産者を訪ねて自分の目で生産の現場を知りたいと強く思った。

二〇〇二年一月、商品の卸先から紹介されたインド南部の生産者団体を訪問する旅にでた。そのひとつであるRTU (Reaching The Unreached) に車が到着したときのことを原さんは今でもはっきり

だから結婚した孤児たちはお産のときなどにはここに戻ってきます。ここは一生、孤児たちの実家なのです」と神父様が話していた。今、思い出してみても、そのときと同じように胸のあたりがジーンとするという。

フェアトレードで原さんがもっとも共感するのは、生産者の自立を支援するというところだ。仕事は人の役に立つことで成り立ち、対価が支払われる。誰もがもっている体という資本を使い、自ら生きるための糧を得る。仕事が体力や気力を養ってくれ、年月が経つと能力が身につく。仕事をする力が生きていく力を養ってくれるのだと原さんは考える。

フェアトレードとは

原さんにとって、作り手の暮らしや家族の姿が見えることが大切だ。原さんは訴える。想像してみたい。わたしたちが買ったものを作っている一人の女性の暮らしを。彼女は仕事を、彼女の子どもは学校に行くことができる。それは喜びだ。そうして彼女は家族を養うことができる。それは誇りである。大勢の人びとの買いもののお陰で、彼女の子どもは、わたしたちの国の子どもと同じように健やかに育っている。どこのだれの子に生まれても希望と未来があるように、広く支えあって暮らしていく方法が必要だ。貧困の連鎖のなかにある人びとが、自ら働くことにより自立の機会を得、わたしたちはほしいものや必要なものを自分の価値観で選択して購入する。原さんは、フェアトレードを、水が自然と低い方に流れるように、お金を労働の対価として多くの貧しい人びとへ行き渡すための経済の仕組みであると考えている。

思い出す。なかに入ると外の環境とはまったく違う。「きれい！」コンクリートの路地の両側には花壇とこじんまりした家が八〇軒ほど、路地を曲がるとさらに花壇と家が続いていた。手入れされた花壇には花が咲き、整えられたコミュニティはRTU子ども村という名前だった。これは孤児と女性のためのプロジェクトで、訪問した家庭には、夫のいない女性と中学生の娘、そして孤児四人が住んでいた。孤児たちにはお母さんと兄弟ができ、女性は孤児を育てることで報酬を得る。どの家庭にも家が軒与えられ、RTUの施設のなかで安心して暮らしていた。原さんは、なぜ孤児が多いのか気になった。その理由を尋ねると、「貧しさの余り将来に希望がもてず自殺する人が多いのです」という答えが返ってきたという。ここでは家造りのプロジェクトもあり、それに必要な屋根瓦や窓枠、コンクリートブロックなども製造されていた。また幼稚園、学校、病院、老人のための食事サービスなど、貧しい人たちのための事業を何でもおこない、同時に多くの雇用を生んでいた。すごい実行力だと原さんは感心した。「あいね」では、RTUで作られた手織りのタオルハンカチなどを販売している。次に原さんが訪問したのは、アシシ・ガーマンツという縫製工場だった。カトリックのシスターが聾啞の女性たちが社会参加できるように作った施設だ。オーガニック・コットンの衣類を製造しており、女性たちは工場と同じ敷地のなかの寮で暮らしていた。彼女たちは自分で働いた賃金の一部を結婚のときに必要な持参金を用意するために貯金していた。三番目の訪問先は、ガンジークラム。ここにも孤児のためのプログラムがあった。「インドでは実家でお産をします。



道路からのアプローチは自然農の小さな庭畑。「あいね」の前で。右が原さん



天然染料で染められたヘンプ素材のヒマラヤンマテリアルのリュック

「あいね」店内にはアジア、アフリカ、中南米各地で作られた衣料のほかに、環境を考慮した雑貨なども並ぶ



RTU子ども村を訪問。子どもたちの笑顔が印象的だ(2002年1月)



アシシ・ガーマンツの寄宿舎を訪問(2002年1月)

パジャマと一張羅

おがわ 小川 さやか 民博 研究戦略センター

まるで「福袋」

「このシャツには、おそろいのズボンがあるはずよ」。

先進諸国において大量に廃棄される衣類は、リサイクルや貧者への支援をスローガンに慈善団体やリサイクル業者によって収集され、その多くは

発展途上国に輸出されている。世界最大の古着輸入地であるアフリカで、古着は庶民の衣料消費を支える商品である。

アフリカに輸入される古着の梱包は、まるで「福袋」である。ひとつの梱包には新品の最新ブランド品から何十年も筆筒に眠っていた流行遅れの品、破れて片袖のないものまでさまざまな衣類が混入している。そのため、アフリカの商人たちは品質と流行を基準に、晴れ着となるグレードA、普段着のグレードB、節約品や野良着となるグレードCの三つに古着を分類し流通させている。

土着の文化が新しい装いを生み出す

タンザニアで古着流通の調査をはじめた当初、筆者はこのランクわけがまったく理解できなかった。汗染みや襟のたるみなど品質の見わけ方はすぐにコツをつかんだ。しかし現地ファッションを理解するのは至難の業だ。生成りのワンピースは「汚れているよう



グレードCの古着は、農村の定期市においてたたき売りされる

にみえる」という理由でグレードCに分類されるが、擦り切れてペンキのシミがついたシャツは、「ゲットースタイル」としてグレードAになる。技巧を凝らしたブランド品が「ビショー (bishoo) : ちゃらちゃらした若者」の衣装としてグレードBに格下げされることも多い。

冒頭のことばは、パジャマの上着をグレードAに分類した商人に筆者が意見したものだ。それに対する返答は、「これと似た模様のキテンゲ (アフリカン・プリント) がある」というものだった。なるほど、キテンゲを腰にまいた女性が羽織ったとき、パジャマはまったく新しいファッションに生まれ変わった。

タンザニアではすでに欧米のファッションがふかく浸透している。しかしグロバルなファッションは、入手可能なモノ (古着) の素材と土着の文化・暮らしによって再解釈される。衣類が最終的にゴミになるまでにリサイクルを実践しているのは、先進諸国の人びとが捨てた衣類に新しい価値を付加するアフリカの人びとなのである。

みんぱく 私の逸品 百貨店店員用制服 (ワンピース)

標本番号 H0235162
地域 日本
受入年 2005年
特別展 今和次郎 採集講義—考現学の今—
にて展示中

大阪樟蔭女子大学教授

高橋 晴子

民博の収蔵庫には二五〇〇点以上にのぼる田中千代コレクションがある。そのうち、「衣服・アクセサリーデータベース」を利用して、「制服」ということばで検索すると二〇六点がヒットする。デザイナーであり、日本の洋装教育の礎を築いた田中さんは、生涯をかけて民族服収集にも力を注いだ。そのなかの約八パーセントが、職場や学校の制服という事実は大きい。戦前のパートの店員さんの制服などのほかに、アフリカ東部モザンビークで収集した女子のブラウス型の制服もある。現地で衣服を収集する場合、一般に尊重されるのは濃厚な「民族服風」色調の、手縫いの衣服である。多くの地域では、それはそれとして大事にされてはいても、もう日常の衣服ではなくなっている。田中千代の目はその現実を見ていたのだ。

おなじ目が、若き日の今和次郎にもあった。大正中期から昭和初期にかけての、断髪に短いスカートのモダンガールの跳梁を、今私たちは「アサヒグラフ」などで見ている。銀座通りはまるでこんな女性たちであふれていたよう……。しかし今和次郎と吉田謙吉のクールな目は、あの考現学調査によって、そんなモダンガールはごく少数派だったことを証明した。

さて、田中千代コレクションの制服のなかでも、目をひくのが大丸百貨店エレベーター係の薄茶色の制服である。胸を飾る左右対称につけられた一〇個の金ボタンと茶色の縁取り。側面にある幅広のベルト通しにも同じ金ボタンの飾りがついている。襟と折り返された袖口にも茶色の縁取りがあり、軍服のように堂々としている。この制服の持ち主の勤務先は、古くから今の地にある心齋橋店だったのだろうか。近代的なデパートメントストアでモダンな制服を着て、それこそショートカットにハイヒールを連想させる彼女は、さぞかし鼻が高かったろう。ただ、彼女とともに働いたこの制服に、裾あげの跡が認められて、その後の、モノのない時代のことを考えると、いろいろな思いが頭をよぎる。



「衣服・アクセサリーデータベース」には、みんぱくに所蔵されている衣服・アクセサリー標本資料の詳細分析情報、および各地域のフィールド写真が収録されています。服飾の用語や地域など、さまざまなキーワードに対応しています。



波の神を祀る人びと

よしもとやすこ
吉本 康子
民博 外来研究員

アジアの縮図のような町

ベトナム中南部、荒涼としたサボテンの林と赤褐色の砂丘に囲まれたファンランの町のはずれに、丘の上に建つ煉瓦造りの塔がある。一七世紀にこの地域一帯を統治していたチャンパ（二世紀〜一九世紀）の王を祀るこの塔には、王の上半身が模られたリング、妻たちの彫像などが祀られている。塔の入口は南シナ海に面しており、王が海を眺めているようにもみえる。わたしが最初にこの塔を訪れたとき、「王の妻の頭部は一時盗まれてなかったのだが、最近もどってきたんだよ」とチャンパ人の管理人から聞かされた。ベトナムで「バラモン教」とよばれる、ヒンドゥー教の要素と民間信仰が融合した独特の宗教を信仰しているという彼は、この地域にはさまざまな宗教を信仰する人たちがいて、この王の信仰に反対する人びともいるのだ、とつけ加えた。確かに、ファンランの町とその周辺には、ベトナム人が管理する仏教の寺、カトリック教会、民間信仰の神を祀る祠、華人の閩帝廟、チャンパ人イスラム教徒のモスクなど、さまざまな宗教施設がみられる。まるで多様な



塔が建つ丘の上から眺めたファンランの町

宗教が混在するアジアの縮図のような町である。管理人の話聞きながら、宗教や風習をめぐってここでのどのような交渉があったのだろうか、とわたしは考えていた。それから機会があるごとにこの地域を訪問し、先住民であるチャンパの人びとの生活や地域の歴史を調べている。

に投げ出された。イルカに飲み込まれたエツワリーの魂はクジラとなり、水害にあう漁民を救うようになった、という。津波によって亡くなったチャンパ人エツワリーは、「ポー・リヤツ」、すなわち「波の神」とよばれて、「バラモン教」、そして、イスラムを受容した「バニ教」チャンパ人信徒に、現在も信仰されている。

波の神を祀る

波の神の話は、チャンパ人が海と密接にかかわって生きてきたことを示す伝承である。わたしが訪問した村の人びとも、ときおり供物を捧げに、波の神の聖地に行くらしい。以前、この村で調査をしていたときには、「ポー・リヤツの夢を見た」と言いだした女性の呼びかけで、数十人の村人が祠堂に行くことになった。彼らと同じ馬車に乗せてもらい、わたしはその様子を見学することができた。祠堂がある場所は、現在はベトナム人の漁村になっており、祠堂そのものは、ベトナムの王を祀る宗教施設になって



波の神の祠がある漁村

いた。穏やかな海にお椀型の船がぶかぶかと浮かぶ、ベトナムではよく目にする港の光景が目の前にあった。祠堂の裏庭には、津波に巻き込まれて水死したとされる「一名の「ジャワ人」を埋葬した土饅頭が、漆喰で塗り固められた状態であった。はっきりとした年代や目的は不明だが、チャンパ時代にジャワから来た人びとである。馬車を降り、供物を持ち運ぶと、村の人びとはそこで「クルアーン」の誦誦や供物の献上をおこなった。そして、「ポー・リヤツが祀られている」とされる「前賢」と書かれた祭壇の前では、女性たちが踊りを献上した。ファンランやファンリーの海岸沿いには、波の神を祀る聖地がいくつもあるとされる。しかしその多くは、ベトナム人の居住地になっていた



供物載せて漁村を歩くチャンパの女性たち



「ポー・リヤツ」を祀るとされる祭壇。中央の「前賢」は「過去の賢人」などを意味するが、ここでは先住民の神、すなわち「ポー・リヤツ」を指しているのであろう。かつて中国の支配を受け、儒教の影響を受けたベトナムの宗教施設には、このように漢字とそれを応用したチュノムで飾られた碑文や位牌などがみられる

り、荒地になっていたりするらしい。チャンパの崩壊とともに、チャンパ人は海から離れた内陸に居住せざるをえなくなったからであろう。とは言え人びとは、聖地から離れて暮らすようになっても、伝承に記憶される津波の犠牲者を鎮魂し、波の神に祈りを捧げてきたようだ。ところで、ファンランの海岸沿いには、原発の建設予定地になっている場所がある。「世界最高水準の安全性を有するものを提供する」として日本はこれを支援しようとしているのだが、「ポー・リヤツ」の伝承を有し、現在も鎮魂の祈りを捧げているような地域に、本当にそんなことが可能なのだろうか。遠く離れた国の伝承を聞きながら、いまだ収束していない日本の原発事故の問題が頭を過った。

鯨になった青年の話

ファンラン周辺に暮らすチャンパ人の多くは水稲耕作で生計を立てている。とはいえ、彼らの祖先はインド文明の影響を受けた国家チャンパを現在のベトナム中部に築き、海上交易に従事していた人びとだ。交易を通じてアラブや中国の商人らとも接触していたので、海からさまざまな文化を受容したに違いない。

二〇一一年の夏の調査では、ファンランから六〇キロほど南下したファンリーという町の近くにあるチャンパ人の村を訪問した。この地域のチャンパ人と海域世界、とりわけ、イスラムとの歴史的な関係を知るために古い文書や伝承を探し、古老に聞き取りをするための訪問である。こうして集めた伝承のひとつに、「アラブ」に向かい、ある師の弟子となったエツワリーという青年の、次のような話がある。エツワリーは、修行の途中で故郷に戻ること申し出たが、師は強く反対した。しかしエツワリーは師に隠れて舟を作り、反対を押し切って旅立った。すると、師がかけた呪いのことばのとおり、エツワリーは故郷の浜辺沖で津波に遭遇し、舟が大破して海

5月

みんなくウィークエンド・サロン

研究者と話そう

■時間 14時30分から15時30分

■展示観覧料が必要です。

※都合により、予定を変更することがあります。

国立民族学博物館（みんなく）の研究者が来館された皆様の前に登場します！「研究について」「調査している地域（国）の最新情報」「展示資料について」など、話題や内容は実に多彩。

どんどん質問をおよせください。展示場でお待ちしております。

6日

(日曜日)

話者：近藤雅樹（国立民族学博物館 教授）

話題：考現学を楽しむ

会場：特別展示館

13日

(日曜日)

話者：朝倉敏夫（国立民族学博物館 教授）

岩城晴貞（文化施設・文化事業プランナー）

話題：「済州島の民家」の調査と模型

会場：本館展示場（東南アジア休憩所）

20日

(日曜日)

話者：佐藤浩司（国立民族学博物館 准教授）

話題：物と家族——ある特別展の舞台裏

会場：本館展示場（ナビひろば）

27日

(日曜日)

話者：久保正敏（国立民族学博物館 教授）

横川公子（武庫川女子大学教授、元共同研究代表者）

話題：大村しげコレクションを読む

会場：特別展示館

1年間みんなくに何度でも入館できる「みんなくフリーパス(3,000円)」をご利用ください。

本館展示は何度でも無料で入館できます。他にも、みんなくを楽しむための特典がいっぱいあります。

特典◆本館展示の無料入館◆特別展示の観覧料割引

◆みんなくミュージアム・ショップとレストランの10%割引

◆万博記念公園内および周辺施設での利用割引 など。

詳細については、財団法人千里文化財団までお問い合わせください。

(電話06-6877-8893 / 平日9:00 ~ 17:00)

編集後記

30年あまり前、民博への新任者は、当時の梅棹忠夫館長から『月刊みんなく』での対談をまとめた二冊の新書『博物館の世界』『民博誕生』（ともに中公新書）を手渡され、これで民博を勉強するようにといわれるのが常だった。博情報という語はわたしもそこではじめて触れ、以来いく度となく耳にし、情報集積機関としての民博の役割をたたきこまれてきた。確かに当初から民博は情報管理施設をもち優れたスタッフも設備もそろっていた。しかし今でこそいえるが、当時から情報集積機関としてフル活動していたわけではない。高価な装置が使いきれずにいたり、入力作成された情報も十分利用されず、計画だおれや試行錯誤の試みもなごかあった。先駆的すぎたためかもしれないが、梅棹がいう「設備がニーズをうむ」という路線は、高度成長期も手伝い継続してきた。その結果、今や民博はデータベースの量も出力も飛躍的に増加し、まさに民族学の情報基地化しつつある。今回公開された探究ひろばはそれをうかがいしるには格好の窓といえる。ぜひのぞいていただきたい。（庄司博史）

先月号（2012年4月号）8ページ「考現学からの旅立ち——根にある暮らしを伝えた大村しげ」の右下写真にて、写真撮影者の記載漏れがありました。写真家土村清治氏による撮影です。謹んでお詫び申し上げます。

●表紙：イメージ・ファインダーのトップ画面。展示場にある資料が並ぶ

次号の予告

特集

あたらしくなったヨーロッパ展示（仮）

月刊みんなく 2012年5月号

第36巻第5号通巻第416号 2012年5月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1

電話 06-6876-2151

発行人 八杉佳穂

編集委員 庄司博史（編集長） 榎永真佐夫 久保正敏

菅瀬晶子 山中由里子

編集アドバイザー 山内直樹

デザイン 宮谷一敏

制作・協力 財団法人 千里文化財団

印刷 日本写真印刷株式会社

*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係にお願いします。

*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

交通案内

●大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分

●阪急茨木市駅・JR茨木駅・北大阪急行千里中央駅からバスで「日本庭園前」下車、徒歩約15分（茨木方面からは、もっとも近い「自然文化園・日本庭園中央」バス停で下車できるバスが1時間に1本程度あります。詳しくは阪急バスにお問い合わせください。）

●自家用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」(有料)から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある民博専用通行口をお通りください。

●タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れてできます。



みんなくホームページ

<http://www.minpaku.ac.jp/>

